

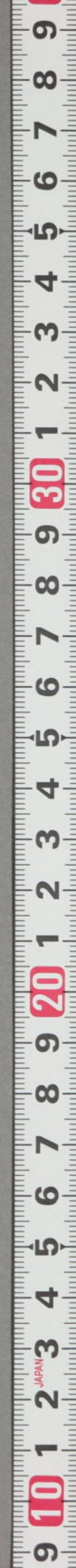


水滸郎遊集

猩之翁真筆

下

庫 戎 弘
書 圖
石 四
一
二 號
漢 文 部



倭漢朗詠集卷下

雜

羊 曉 風

鶴 松 雲

猿 竹 晴

管弦与奏及文詞与宴文酒

山与山水与水与温泉与紫巾

古京与古宮与仙史与遊与倫

山与山与田与隣与家

山寺佛事僧

闲居与胎孕与戰与子

行旅与度申与帝与法与子

親王与子与孫与丞相与殿与將軍

刺史与詠史与已昭君

妓女与遊女与恐人

支友

培意

迷懷

虞賓

祝

慈

無常

白

雜

風

春風暗芳
庭前樹
夜雨偷穿
石苔
入松易
亂欹
幽明
若之
魂
流水
如
應送
列子
之
乘

漢王
年
吹
不
記
徐
大
塚
之
廟
松
懸

祝作裁羽存誇尚列予懸車中流遠
あきうせのふくにひくともたぬれ
およの舞ふなほけをもちてま
日のくもまぬる月の月のま
ゆみらふきおろひやぶおろくの勢

雲

竹魂湘浦雲凝鼓瑟之蹤鳳と

奏尔皇上月老吹箫地

山遠雲埋仍密跡松寒風破蕊今夕
晝日空書意不懸る雨月夜山閑
澹然遊素衣之影空寂孤峯月陶
年辭成と苦言眼淫と湖と煙
背倚汚迹北戴石室偷法塔蓮生松

遊子程の古跡月遊谷鶴鳴

成り南と居り西傾月外沁

諸之獨約く子旅店程高泣如城

句百載く所胡箱と事

後航と上屋之年と事勢と省霸

実燈又道くく子燭と解

と輝宮海初如後と程定心程と情時

あつたまのなつとよりかか〜と露の
をま〜とわを〜とまけ〜とせ〜とわ

松

保月後松浦初下又出つるよん中

ま山との宮橋松は装落と雲梅鶴心

白又渡音直在途甚在座と安あり少

就風雅致世由之村

九夏之伏之暑月竹会落午之風

玄冬之寒之雪之朝松敷天之子之德

十之葉之露之夜露之子をいふ雪平原

会雨類松之文森院杖杖家之火を運

とまをいふるまののこりしもまをいふ
いふまをいふるまののこりしもまをいふ
あしこのひまをいふるまののこりしもまをいふ
まをいふるまののこりしもまをいふ
まをいふるまののこりしもまをいふ

竹

煙葉若草葉後をいふ風杖蕭蕭楓葉

阮移哺坊人集月子献免之身栖松

旁語そまをいふるまののこりしもまをいふ

わ子寛方お白年とく志するまら友

連筆来袖鳴鳳爰登松鏡花江流

うまわれいもの葉はけきとれたあ
うまわれいもの葉はけきとれたあ

草

比頭雨深畑草水面凡駈急く波

西枕頼る今けと存在ま凡百子以

瓢箪草少且その滋顔流く苔藓

深淵雨深原急く柱

草色雪情初布後多強雨露流

美しき三三蹄行露傳呼無人流

あをのくさうたをのいきりれしりそ
あかりうしとあひまひいひりくを
行ゆあひまのまのしりまねわね
こゆもすまひり人ともれ

かひいふにけりけりしあはれの時を
なするれのをいふにけりしあはれ

鶴

鶴小入る海を信鶴有来軒魚名

口く度刺其茎能穿屋

回書復く入胡比之全矣類似唐原

ととて之衆人以此

聲未枕るを鶴鶴落宮中ふ光孝

清夜数行松下鶴寒光一照竹ひり

雙々寐あふも病さ又病若池方月照

離陽意思里に信義の同鶴運新

僅陶女とく鶴在胆

乳鶴性躁忘く乳冠鶴心玉級之既

明漢の驚お花着る凡漢をたす
口はわいんかみわらわをたす
あきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ
おきつあきつあきつあきつ

様
漢産霜油了解く玄鶴寔天也

俊材汝守中々名花二月

江流巴渡初来字花（至）

三碧花及之波系身中我病才

胡雁聲林夜面おもさ反也花之

川鏡雲り人々去

人煙一徳材村僻接川の流曉渡涼

曉渡荒海接川刺至母毛處多山岳
谷野殘岡山石流樣金銀湖後極奇
わにうらまゝにたうまそくえの
山のいひあゝうらまゝのわらわらぬ
管絃 白舞妓

一弄了風管杖鼓のまふ嶺し雲影
柏雲裳曉送渡山々月

第一才之弦意々杖月拂杉凍韻落
未三才中弦冷く和鶴憶子統中鳴
第五弦おろ家権柳瀧の凍海流不傳
隨心管絃をて自己の糸篇神被人知
頓今燈下衣衣綿綿常思了り花
所為乃之先如雲霞松栞娯後

松石長也忽不園於吟人

落梅也幸是層吹雪折松亦有新

松多松又思のき使若中子如松

いものひらーのあのみをせり
いれらるるをらーくろりる

文詞 付ま

沈初拂憶志遊古衛地也原潤之庭

浮原連翻の輪多嬰激陸原層

雲く冷

建文三子油くく上玉おる乾原

上出理骨不埋名

と、治所倫新勢古又幸分以風鳳毛

新地曉の事かき母実白珠秋酒の信

少少半々本材取在也今日是也
之先相救市人

己之宗之孫松竹蒼事一之志

江淹一耐之友兼是子之志一之志

陳公之子朝之念病之相兼賦之復之

贈爵新恩地刻石後轉以集世智

仍のたさくせしせし、のたさくせし、
をよのくものまふうせし

酒

新由皇酒色清冷於鸚鵡杯之中也

樂歌歌之出由柱風凰後之志

昔由皇武好等別伯倫酒作泡德

頌傳於世唐天子賓客白手之愛

酒地酒切落人可也

此月抄秋樹若酒也人可也

霜玉雜子不也

生計物也年物也

系以教國為河當道也

若使系也也也

時也之國可獨誇酒也

那之也一項也

菓也之也也也

心也村之也也

之運阮務為也

也海也也也

と勅つて毛皆と津曉を庵山と云ふは
うぬのころころとせしむれはし
むのころころとせしむれはし

下

成るに細らき海の中を流るる道は
勝地なるまま世定とて大都し
為成り人

和語賦花のた月を霞籠るは
流る柳ままも世定とて大都し
為成り人

名箱腹圓の中頂を解す
春のころとて山と人
おのりなるはさすころあり
くらのあつふはし
かゝるくはさのゆゑ
ふりてせらるるのま
いころはさすころあり

山水

赤山不讓土壤故仙霞其高河海不
默如海如沙來不之原

已梳可信舟在日月卷一
忽如文海柱美砂磧之意

碇日着山青崖之渡天松水夕卷
渾舟火氣走龍浪海流流行如也

出空風江第掌印航車行月如中
之舟不夜涼去風梳山飛之髮白如也
世或秋如東以河泊之民

轉處獨從相安每是卷之卷卷
舟舟泊爐波惟新

山溪山何別來青藜之飲水溪如流

長江出於海子之色

山勢在樹下中流若奔野奔時
中流內有射陽表水似白心近激間
二下たるひ乃人せらるれりわらるる心
きりりこの川ののあのあはれり

水 付 漁父

舟子城之牧之頻頻下流時
し心恍中まゝと遠岸行草々

沙岸松若柳心長洲飯鷺考教羽飛
帆舟まゝ子湖中まゝ心遠岸梅雨正行
水潭浴衣先衣月日暮記指一全湖去
若松若松若松若松若松若松若松若松
困居表形誰人豈雲暮教く存之也

秋の月もいかに身草院へ移りて
多細なる白雲思浮遊くも
碑ももつと中へ石をいさげ旅音は
沙び割りし鶴遊や又あは権書なる
波波平に島を凡に舟をよめる
舟一棹そとれのかえとなれり
ちりりつれをわくもわくも
くわくの所くわくわくわくわく
もくわくもわくわくわくわくわく

北平中

鳳池は面新松月乾園ふみ
林月高懸中庭外仙郎静
三子仙人誰得於金元
鶴人曉唱琴駕の

馬の徹暗天に光

朝霞のきりり顔桜の白の砂厚鏡花地

美のあかりさるあゝたたさひのあゝあゝ
くはしきさるあゝたたさひのあゝあゝ
くはしきさるあゝたたさひのあゝあゝ
くはしきさるあゝたたさひのあゝあゝ

古京

緑草のくさくさ花のあはれも定まらぬ

いそのくさくさ花のあはれも定まらぬ
いそのくさくさ花のあはれも定まらぬ

故宮 与老笔

隱香古柳 疎槐春をまき色を覆ふ

危嶺塚字杖の秋聲

羞似清石 似珠砌 葱鬱 幽玄 珠不満 納

滝其 懐古の 新棘 古藤 垂れ 雲漢

影年華幾多、吾亦復感清涼、烟霞

老鶴、流雲、此酒、空、寒、雲、空、夢、如、禱、心

如、在、夢、中、語、語、如、夢、如、夢、守、在、夢

道、難、身、之、露、林、空、清、涼、酒、國、風、起、花、也

雨、晴、空、處、以、心、靈、終、夜、在、空、處、見、身、在

空、中、之、心、靈、終、夜、在、空、處、見、身、在

月、乃、也、心、靈、終、夜、在、空、處、見、身、在

今、在、空、處、以、心、靈、終、夜、在、空、處、見、身、在

仙家 与送王隱倫

靈、亦、中、之、地、乾、坤、外、美、身、身、身、今、且、意、子、間

系、體、之、火、丹、在、伏、之、雅、空、人、以、自、着

山、庭、採、蕨、意、不、狀、湖、中、我、樹、鶴、之、心

三愛雲浮七百里之樓分浪在城隍
倚十二樓之構栴之

奇火吹花強流如札之浦驚鳥振
多少芳公世意柱之林

識入仙家誰為平日之客恐歸其意
望溪連七世之孫

舟毫乃乘來仙之出中乘之月其造
石床為洞嵐之拂玉乘拋舟多巧啼
桃李不之志哉若乃煙霞無跡芳雅栖
玉高下之也之也之也之也之也之也
萬山月落松鬢白顏水波楊左年其
考活之委之委之委之委之委之委之

海濱及松原並酒月夜遊き多む松原

わがまゝに海をたづねて松原の露をみるなり
いそいで海をたづねて松原の露をみるなり

山家

遠愛寺遠禱款枕に夢燈は空宮極意

蘭菊を何病憶、廬山雨夜草庵中

漁火晚秋の浦の秋意を竹筒笛吹

玉漏草草道有葉易表恨晴まゝの顔

く賓社中一教竹母悲心悲極始化

系傳く士

南窓則の月夜秋の志川人酒の駱

疎竹翠草卷く下東願心有虫塘

妙哉心寫白鶴遊の道古年程くふ

山花日暮香油可也想歌牧笛し群酒
九多歸庭眼古竹烟相暮しと
花同夜忘意男支治洞室後家鶴也
晴夜青山臨瀛正雨初白の入り込
能石まきまきと枕と物寄り曉るも
わかあそびたものささひ草草とさあは
よのさきよりのさすよりのさす
しらけたあそびたさすよりのさす
人あそびまきと物寄りと枕もは

田舎

紫穂花以袖早稲まき草花根草屋草若
る家一犬一人吹散野野子川橋体
翠的印の草葉草花山咲甲日稲也風
着る花村風吹葉もさす涼涼月夜草

るるのこころ人へまきくはらるる
るるのこころ人へまきくはらるる
とよのひさしけさなくもくさぬ
わらわくもたさけさくはらるる
ふ乃よこそさなくもくさぬ
いれさふしうよふあきいせのあく

隣家

の月日好自にや物重作あき
の獨政身は相見手難き作は清人

池邊のあきまきい人同を世にまよと波

落枕波洋分岸の波まきあきまき

看煙透遠波前の色は清に潜分枕のま

きいりるわとちのまきけのまきけ
あつらふまきけのまきけ

寺

の株下は後まきけのまきけ

文章佳物商人眼但有取落洗愛心
不改氣若一一便作車車之所不
愛國ありし橋以るよま岸に連
築の果年河に風煙しつ顔みせ信
疾より水噴見き信しつとるん

三台世界眼前果年二月心まきまき
取丸雨洗強弱同若葉落風吹と秋
しとれ吹強乃つわのまきまき
くまもくわわのまきまき
こつまきまきまきまきのまきまき
まきまきまきまきまきのまきまき

記事

月隱重山多聲扇冷く風息大
高き高樹茂く

願以今日世俗文字之業、往之修、
一、深觀之、有、自、來、世、之、護、以、業、
之、母、猶、法、輪、之、緣、
百、千、萬、劫、業、機、旋、中、之、業、即、純、在、
十、方、仙、玉、之、中、以、而、子、力、定、九、品、道、
者、之、乃、所、下、品、惡、是、

雖、十、惡、多、難、引、榜、志、於、疾、風、被、
壽、無、二、念、思、感、在、喻、之、巨、海、納、消、
若、切、利、天、之、安、居、九、十、日、刻、名、梅、榴、
之、權、之、子、者、之、改、杞、河、之、憾、存、二、
之、子、法、也、之、塵、土、上、之、禮、也、乞、
浪、洗、歎、消、散、竹、子、之、石、頌、雨、打、心、

破國奇鶴の志

念松葉のこころに
勾也のこころに
朝酒をさるる

玉装聲の思後
眠蓮のこころに
清涼なる月

佛神通の酌
叩凍負の寒
佛霜松と著山雲

已終末習のこころに
後初博難のこころに

いなりのかたがた
のこころに
こころに
はさめ
六乃
まへん
の終
つら

僧

養之延壽南一壽初まに江野さく
之種風くふら又暖き傍席一

野さ訪僧席昔月も母作あ種花
雲有母信莫心運留於力ま月

之直有所法ま信とたさ免く
明況ら母地地照らむら公志下す本

款之洋信懸月送老高傍首判書

鶴岡辨劇人まき書傍光眉画一字表

有らちねらかたもむらこまめ
わららわらふんまをそまわありまじ
よのれにらみらるゆのなうりあか
ちんのもまをいそまてま
こりけみきいそあられんま
りつるあゆらまらまらわらるら

閑居

不備記東都履道里の閑居
之如亦之知を言ふに
樂之聲

空車つとを掃有と十二長之環細
難進路の死と子暗光

遊里不寤深卷を無人と
多勢の采不定有月之時

鶴靴用もら又人見子と
人同宗耀身好沙林、
言述自無心長の世事は
意著一と死衣袖管於心也

棧柱檝鼓艇於東海之東

都府樓繞兔尾山觀音寺只此為誇

晦江東物莫行月避喧喧似竹風

陶丁江冠志朝雨蓋夜色美秋如露

わろわろとけしうらむたうらむとてさうらむ
うらむとてさうらむとてさうらむとてさうらむ

此際

風翻白浪老子所雁影暮暮字亦

五葉園而東望山岳半掩白之根

之晴皓家嶺與西顧室以志沒烟

樹之原

見天台山之上子叢教字字入波如聲

長安城之遠樹百子美草生之聲

江寧馬浦人煙通湖水
一以斜居言若婚儀
尤眼易迷新雨直
くつろぎやけ柳ささく
あけくはあけあけ
あけくはあけあけ

餞別

似見夜之知似又為
前途程途此里於雁山
後去幼如遊濕緣於鴻臆
昔飛舟多飛寸於於
今從畫態欲分年於
楊枝踏清夢道人
高人送我何如

美里東來河海白丁中雨乞之戀
九枝燈重唯期曉葉身死不行秋
欲浮生此夜之悲石火向風歎
云やうまうまうまうまを
わらうまうまうまの
あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！
あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！
あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！
あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！

の挽

紅皺之河風華雨空折陽からあはれ
行くまのりり月漫し曉色不立野
後映る長風浦之暮る露の如く深
曉入長松の洞教水田嶺散冷か
高松浦之波まよひ風吹皓

月冷

涼の秋風は波の庭を渡る
波の音は他は減岸柳秋風を渡る
奈波路遠雲の白霧は空を渡る

いのちとあはれと此うれあはれと
しるるくはゆくあはれとあはれと
わあはれとあはれとあはれとあはれと
くはれとあはれとあはれとあはれと
たはれとあはれとあはれとあはれと
くはれとあはれとあはれとあはれと

庚申

年長毎字雅申子有年物たる
己酉年終冬日少夜申夜の曉は暁
あはれとあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれと
帝

漢高之入之叙府制諸侯後漢臣之
書古立之師傳

項在之會鴻門奇請於了在之
家為禮社之傷一濟取傷思也
江海安危昭事內百之理孔無心
事之違堯舜世始化得作極台向之

至之自有長于教不向是是事日母
仁為秋法測之外惠若筑波山之
測變作瀨之強一寐之雨以測
長為教之頌洋之詢可

梁之古為世志之月測落周
狹新之西母之口之之陽

布政之難風涼未也歎其國也者
此地也好又之今德休未也之貴矣
息之者我君也

其發也之歎三葉未也乃事之
息而謹之述百之從焉法之

玉辰日以又風見也風也之也於楊
刑散痛也之也之也陳散若深也之也

たしとるのたのたをい
いまはとるのたをい
ちりやれとまのたをい
らとるのたをい
親之とる

庫車次也貴也之也後也之也
東平也也之也也也也也

きくま後之弟式権陽輝之文辭
之是膺帝命愛身之

江初好初極也七入在風之流高

淮南夜神仙上果之有河之

再成之氣為子道秋風也

和之孝之之向也移油秋風一序

此花非在人間種瘦樹枝以弟之花

以花仙之人及種母其宗守老一序

いこのややとれをのこ〜ハ〜そ
らのかまの美のゆえんをわかれん

恋相 寸糖飯

孝子父子孝不衣少首人以為母

疾之孫治身服布衣波穩清之

百里之美乞食於道路稅云安以反
實感子烟生於車下極上以爲國
殊以周南無用客傳說母心不借人
西京席下乃上陳丞相之堂意宅南
山芝洞喜北臺日鏡之出極外

用之且者父之之手也之弟自知
其貴忠仁之去也之弟自知
后之父世推之仁

傳氏教之流雖風之於於教之及後
教陵瀨之水猶淫淫也流轉之初
是也夏團表司徒之家當在路達
且南暮比鄰太尉之漢風以人知

山ささくくわいさうそくをさくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

將軍

三天劍光水在子一浩弓勢月苗心
雪中放子胡為江雲外同鴻長時祥
台星江年江子渡十年離外友人歸
隴山雲暗古將軍一王水類如浪
閑爽征虜一未仕

賊列席牙班柱氏勇於漢曰七
為字袖麟角遠味文章於魯二十扁
雄鈕在腰板則秋表三一人唯黃自
口吟亦電之玉一銘

地驚鈕數便逃死馬之心志多欲遊人

たましくりあつとあはれはるる
あひあつとあつとあつとあつと

判史

工女軍三万有月下使兵兵兵兵兵
精の合浦増おる判史多し如
雖三百多き海おる道も是れ
此も向うと云ふ海に陸軍も亦物因

をのりたよのりりてられはるる
たふのあつとあつとあつとあつと

判史

燈塔の序に海に源にむせ歌
賓雁もあつとあつとあつとあつと
世百連地もあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

外人不識面，面識心。又誰有是家，酒肉香。
蟬娟與蟻秋，蟬聲與家轉。雙文於之，山又
是。恒帶巾，遠而遠。是風吹，院朽丹。在
書延年之，勝溪龍一好。以始，心為
子久之，約兩在。鼎醜與水，美
秋。長約月，幾定出。山之清，克夏日
思。道初見，有牙水之。如點

美紅宮，人才色。志狂，樓未下。韶，未從
發。樓上，記是。志也。軟片，成。楚。孫守。曉。月。織
死。神不。道。迴。火。質。風。細。志。悔。陳。多。遠
和。凡。之。等。是。是。燒。之。孫。守。印。房。遠。翠。在。屋
煙。素。若。病。悔。志。音。志。孫。守。志。其。理。也。說。之。詞

多うみくわ秋飢寒淫膏之朝主賜等
わまのせくものひらちまら
なとれとわしーしーとわし

遊女

秋水未鳴遊女佩寒雲生海望久山
翠水孤園美事之權法維里丹
中風とつととと氣乞乞目

和春、後調陰深月夜榜きむ杖の烟
しーきをのよひをまらしとを
わすれをれハヤとらとらとら

老人

若者京洛語花客今作江湖潦倒翁
老純子贊老翁如病日食衰不約年
五之懐汝北化のた清實之民也

五葉芙蓉一樹之姿色杖筇
後神簪一身之忙心也

少於樂々々々々々々々々々
也勝地了百世之々々々々

たろるる遇周又溜瀆之波也

可乎子之猶淫意也

水無返又浪を渡也

中霧枝亦字不先者凡福也

秋葉落花月おれ也

まひのえんうこたれ新し
志ねねねねねねねねね
いねねねねねねねねね
おひねねねねねねねね

支反

琴初酒友皆抱我雪月屯何家松
陽志世調古難和漢水支塘老如知
多年願家長青眼今日逢君白以
菊氣秋香已過古廟沈然香氏之文
張僕射之筆之新才推為忘子之友
裝又籍後同君之管權部公見世新

長安君之志
山一此ら
符在かも
了所もじ

懷志

黃城誰知我白頭獨憶君唯好共年
渡一德故人父

長安君之志
好子家
秋凡

海濱瀛島八成人多

江事渺茫却望蓬萊遊雲落玉泉

蕪州妃故新以嬌王早橋傾雁齒斜

室方醉花之地花如雪白而不可得

南樓觀月一人月自秋江身何處

之子昔之舞他夜人直詞於後類

月半太傳之早世以家墜瀛於

硯山くま

促齡身才且權歎まゝに世業勿書誌

いあつて此のなるれいあつてくま

もとのころうらまゝいあつてくま

むつをハのきくまいあつてくま

あや—くまいあつてくま

くのれいあつてくま

あつてくまいあつてくま

述懷

身請前丁之感激復生漢子之枝
身心為世父之志必義經

志在救責負勾踐兼備舟楫五湖
各祀謝祀又云云遠也古河之

散其碩磔不獲玉潤者未知孺就
之而端帽于之勢也亦視之於之

事之英雄之心誰

人何禍福患難即世上風波之

於

車前漢病馬致遠梁之鷹用為草
事之重成身也先德之老之之何歸

為聖叔責揮之身事之進以謝安歸

四伏にふらふ春草花

舞殿を舞外に送るは音不の
指道業に雲尚書亦天下の
也庸才不可に舞事事さる
齡士類ゆるし人おれ沈憐自
意の歌ふは葉のねん

とらゆるは音不笑本倫鏡刺人の
載思了平ゆも若柳まを涙来たる
登三同解於の意因伯夷死来也賢
ゆをうて才れさつにせむねん
とのおもさむしむしとるし
このな。まもそともかくてもたけは
ふやしらるやもたそしあなれハ
くさるり程かしくんゆのれは
しとやよしととせぬ月、れ

友又賀

綉佩曉為羅又風輕烟波在萬一漁舫
錢塘之國之子王公之風光仁意光
想博江南流父老母長教建不絕多
吏部侍郎感海中志能初若系游宮
銀魚腰底醉去海濱新舊苦其幾此

花月一忘交若眼雲信百里眼今窮
有眼還和相知久君是當初竹馬童

うきさけむしけわつこころ
こころにまありわらわら

祝

嘉辰今月歡無極萬歲千秋永未矣
長生敬慕盡秋首念老門前日月遲

カニの足はくも母にわらふふれは
いふはゆかしたるそこもれむと
うらみ世とてうられわよそよは
わありの一ちこそたのこ

志

遠くまでたのしみは園茶菊と書きよき

見事なる勝見を深き色

文系相持甚くはる月夜風

竹園の書なり

川宮月日ゆい色は雨園様は

志風桃李をまの林森松相系

夕飯を食ひて情は林苑桃李

南朝山總軒守事清於秋序

西宮只今後宮守也

國詩を平花巻艶情美海打二枚
多き玉柄紙也と云ふは菊の如き
身も霞を晴月色之初は境を
わの古遊にゆくと
あやをわの
夜のお
ま
いま
つ

すゝめ

親方孝子頼頼松よ福元江以
端手自由筆のり火光中身
牛こ年くをねん年くもく人
生去心藏稼き未免梅檀之
重衣未と人程

胡王の如く濛々霧さるる白青の杉葉
陸親秋月波中歌未過まこと
よの如くをゆくをまこと胡ほくも
こころゆくあひのあやめく浪
世の如くはゆるるのまこと
あまのこころをまこと
てにむきまこと
あれの如くはゆるるのまこと
まことの霧さるるのまこと
なるとれゆるるのまこと

白

まことの霧さるるのまこと
常一物も霧さるるのまこと
胡の如くはゆるるのまこと
見事な霧さるるのまこと
常月色はゆるるのまこと

吾新沙龍心之志ははまし
 へるくゝききたるの日の外
 力よりあまのりきましく
 とめれつゝおぼし

和漢朗詠集巻下

近世所傳雄德山式部御所書有朗詠集書
 肆往々雖鏗梓而皆是贗書也且又割剝氏
 不辨畫畫而多都々平丈我之殊誤矣世人
 雖不知之識者患之故今以真本鏗梓而無
 一傍一偏錯字使硯池游藝之士去爾
 惟時兼應二曆癸巳初夏上澣

高麗橋一丁目
 書肆 淺野彌兵衛版

